
魔法のカガミにお願い（転二）

伊勢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法のカガミにお願い（転二）

【Nコード】

N1486C

【作者名】

伊勢

【あらすじ】

あたしの通う学校の旧校舎に、古びた鏡がある。普通の鏡なんかじゃない。『魔法の鏡』って呼ばれてる。だってね、深夜12時にその鏡に姿を映すと……。

(前書き)

グループ小説の第十四弾、『起承転結小説』です。今回は、起↓叶
愛夢さん、承一↓春野天使さん、承二↓神崎颯さん、転一↓f i n
oさん、転二↓伊勢のアホ、結↓よぞさんとなっています。どうぞ温
かい目で見守ってやってください。

ピシャツ、ゴロゴロ。

どっかーん。

あーもう、雷なんて大っ嫌い。風雲急雨なんていうけど、今正にそんな感じだよ。文字通りすぎて笑っちゃうよ。あはは。あはは……。

「はあ、なんでこんなことになっちゃったんだろ……」

昨日までのあたしは、鏡の中の変態キューピットも、青春ナントカ委員会も、友達の怪しい機関員な仮面の下も知らない平穩無事な恋に恋する普通の可愛い女の子だったのに！

「可愛い、は余計ですね」

変態キューピットが毒吐いた。

「うっさい、鏡割るぞ」

「本気で勘弁してください」

何気に傷つきやすいんだよ、乙女心。

「はいはい、弱音吐かない。とりあえずこの薄汚い校舎から出るよ。あいつらがどこに潜んでいるかわからないんだから」

そうだ、そういうばあかりはどこから入ってきたんだろう？

「玄関からよ」

あ、なるほど。って、へ？

「た、確かチェーンが掛かっていたよね？」

「壊した」

当然のように、当たり前のように、平然と精霊保護員な彼女は言っただけ。チェーンソーでも使ったんかアンタ。あたしなんだか頭痛が……。

ついてきて、と言うあかりに言われるままに、月明かりだけの暗い廊下を進んでいくと、昇降口のような開けた場所に出た。途中床が何度もキーキー悲鳴をあげていたけど気にしない。気にしたら負

けだ。そう思って。

「ここが玄関ね」

来るときに見たドアの内側。分厚い木製の二枚扉は押して引くタイプのものであった。

「ふう、これでやっとこの陰鬱な場所から帰れるね。今日はぐっすり寝てやるんだから」

ホントの本気で胸を撫で下ろすあたしだった。

「寝る前に鏡。忘れないでよね！」

「あーはいはい。忘れてませんよ、忘れてませんとも。もちのろんろんですとも忘れません」

言いながら扉のノブに手を掛ける。この先には自由と未来が待っているんだ。

ピシャッ、ゴロゴロ。

そして雷も、ね。はあ。

今日何度目かのため息を吐きつつ扉を押す手に力を込める。

「あれ？」

動かない。

ガチャガチャガチャガチャ。

動かない。

ガチャガチャガツチャン。

動かない。

「ちよ、あかり、開かないよこの扉！」

「なあに言ってるんのさ、来た時はちゃんと——」

笑いながらあたしと代わって。

「——開かない……」

あかりの顔が青くなるのが分かる。

「どういうこと？ 確かにチェーンは壊したはずなのに……」

それはこっちが聞きたいです。でもあかりが慌てる姿なんて珍しいなあ、なんてのんきなことを思ってる場合じゃなくて。

「ヤバい？」

「ヤバいかも」

ヤバいらしいよ。

と。

「悪いね。扉は封鎖させてもらったよ」

後ろから聞こえたのは、少し低い、ひねた声だった。

「っ！ 桐谷！」

あかりにつられて振り向く。

猫がいた。みあく、って鳴いてそうな黒猫が、黄色い瞳でこちらを見上げていた。

「つて、え？ これが桐谷くん？！」

どう見ても猫だ。視力二・〇なだけが自慢のあたしがこの距離で見間違うはずが無い。最近近視になった記憶も無い、はず。

「言ったでしょ、桐谷陸は猫に化けてるって」

普通に冗談かと思ってた。だって人間が猫に化けるなんてそんなこと――

「よう、新倉。カガミ割ってくれたんだって？ サンキュな」

喋った？！ そしてあたしの名前を呼んだ？ というかこの声

は確かに。

「本当に、桐谷くんなんだ……」

「そ、愛しの桐谷くんだよん」

……なんかキャラ違くない？ 桐谷くんはクールキャラなはずなのに。

「対女子用の色眼鏡だよ。ったく、モテ無い男はこれだから嫌ね」

「つてめえ！」

あかりの横槍に桐谷くん（猫さんVr.）がつっかかった。

「大体“青春返せ”なんだって、クレームが趣味の大阪のおばちゃんでも言わないような事よく平気で言ってられるわね。ロマンチストのつもりかしら？ あー恥ずかしい」

あかりさん毒舌絶好調。桐谷くんの表情が、心なしか上気しているように見える。猫の表情なんて分かんないけど。

「それは聞き捨てならないな」

どこからか低く冷たい別の声。

「その声は荒城先輩ね。どこにいるのよ？」

「ここにいる」

ぶーんと、あたしとあかりの間を飛びかう虫がいた。

「まさか、コレ？」

「コレとか言うなっ！」

桐谷くんが叫ぶ。そんなこと言われても、明かりの言った通り羽虫になってるなんて、ねえ。プリンスな先輩のイメージが……。ハシカチ王子ならぬ、羽虫王子なんて、お世辞にも格好良いとは言えないよ。せめてハニかんで欲しかった。

「青春の無い人生などクソだ。ドキドキや刺激を求めない女子に未来は無い」

ドキドキとかいっちゃってるよこの羽虫。

「あつれえ、今日は言うんですのね先輩も」

あかりはいつになく攻撃的だ。

「ボクはいつだって言っているさ。運命の相手だって？ はっ、反吐が出る。そんなちっぽけな鏡の中にしかいないような胡散臭い男に決められた相手が運命だなんて笑わせる。青春推進委員会はそんなフザけた鎖から、女の子達を解放するために活動している」

『青春推進委員会』ってネーミングはフザけてないんですね。羽虫先輩はなんだかよくわからないけど正論っぽいことを言った。なんだかよくわからないけどね。

「はんっ、結局はモテたいだけじゃない。自分がモテないのをそうやって人のせいにするところが見苦しいって言うてんの。それに加賀見はキューピットなんだから。キューピットが決めたんだから、そんなの運命に決まってるじゃない！」

うわ、あかりも負けず劣らずメチャクチャだ。

「うるさい、ブス！」

「黙れナルシスト！」

あーだ、こーだ、ごによごによ……。止まんない、止まんないよこの二人。どっちも最初のキャラ設定なんて完全無視だ。

「だいたいさっきは尻尾巻いて逃げ帰ったくせに、今になって戻ってくるなんてどういうつもり？　しかもこんな手段まで使って」

「ふっ、分からないかい？　鏡は割れたんだ。そう、そのお嬢さんの手でね」

あたしを指して（いるのかは羽虫だから分からないけど）、先輩はくくつと笑う。

「今精霊の彼が宿っているのは守護力の弱い小さな手鏡だ。ならば、ボク達三人にも壊せ無くはないんだよ」

ごくり、なんてあかりが息を飲む音が聞こえた気がした。

「僕達三人、ね。て事は、当然クリスくんも……」

「ここにいますよ」

廊下の影からクリス・アランくんがひょっこり顔を出す。

「あ、落ち葉じゃないんだ！」

「は？」

変なところで驚いてしまった。どんなリアクションだよ、あたし。サファイアブルーの瞳にくるくるキューティクルな金髪。良かった、あたしのクリスくんは変わってない！

「あなたの、じゃないですよ」

苦笑する表情もまた可愛い！　うーん、溶けちゃいそう。

「ったく、いつもいつもムサイ男三人でつるんで気色悪い」

あかりはものすごい美男子が嫌いな子なんじゃないかと思わせる、そんな口調で毒づいた。たぶん嫌いなんだろうな。

でも、と付け加えて彼女は続ける。

「まいったな、さすがに三人相手となると私一人じゃきついわね」
珍しく額に汗を滲ませている。

「綾、とりあえず時間を稼ぐからその隙に逃げて」

「えっ？」

「逃げてる間に加賀見を安全な鏡に移してあげてね」

えっと、いきなりそんな無茶を言われても……。

「つべこべ言わず逃げる！ はい行った行った！」

すごい剣幕で急き立てられて、とりあえずあたしは駆け出した。
なんだか森のくまさんみたい。

「逃がすかよ！」

桐谷くんの声が聞こえたような気がしたけど、振り返らない。だ
って直後に聞こえた音があんまりおっきかったから。

どかーん！

ばしーん！

ばりばりばりっ！

恐っ！ 一体どんな戦い方したらそんな音が出せるんだろう。外
の雷なんて比じゃないよ！

お母さん、私は今日、一般人が立ち入っちゃいけない世界がある
んだって知って、ちよつと大人になった気がします。

はい、すたこらさっさっさーのさー。

逃げる。逃げる。逃げる。

逃げる？

どこへ？

玄関は封鎖されちゃって、入ってきた窓には届かない。この旧校
舎に閉じ込められたと同じなあたしに、逃げる場所なんてあるのか
な？

きつと途方に暮れる、なんて難しい言葉が今のあたしにはぴった
りなんだろうな。前が見えないよ、前が。

前。前に人がいた。長い廊下の向こうから、トタトタと歩いてく
る人影が見える。月明かりに照らされて浮かびあがったその顔は。

深山紗季。

あたしの友達で陸上部の部長がそこにいた。

「あ、いた！」

紗季ちゃんはこちらに気付いてニッコリと笑った。薄暗闇の中で
もはっきりと分かる邪気の無いキレイな笑顔。

「まったく、探したんだよー。部屋にいないからどこいったのかと思っただらやっぱりここだったんだね」

紗季ちゃんはとっても正義感が強い子なんだ。この子にも鏡のことを喋ってっただねあたし。

「ごめんごめん。実はかくしかじかで……」

「ふむふむ、かくしかじかなんだね。で、詳しく言うとうどういうこと？」

全然通じてなかった。仕方なくことのあらましを話してあげた。

「ふーん、鏡なんて本当にあったんだね」

ういういとした眼差しで話を聞いてくれる紗季ちゃん。

「あったんだよねー」

「ねね、ソレ、私にも見せてくんないかな？」

ものすごく期待に満ち溢れた目。

「ん、いいよー。ほら」

ポケットから手鏡を取り出し、渡す。

渡した。渡してしまった。彼女に。

「へえー、これが魔法の鏡かぁ」

紗季ちゃんは珍し気に手鏡を手にとって、またニツコリと笑う。そして思い切り、踏ん付けた。

乾いた音が、暗闇に小さくこだました。

(後書き)

「だいたいこのお話って最初はジャンル恋愛だったはずなのに！

今日はあたしのと きめき トウナイトフォーエバーな予定だったのに

！ そんな要素微塵も感じさせないこの展開は何？ ワッツ？」

「まあまあ、そこら辺は次のよぞ様がなんとかしてくれるって」

「え？ よぞさん？」

「あ、いや、こっちの話ね」

っていう作者の願望でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1486c/>

魔法のカガミにお願い（転二）

2010年10月8日15時12分発行